

「地域エリート」の存立構造とその変遷

— 昭和30年代卒農業高校OBの事例を通して —

奥井 亜紗子

目次

はじめに

1. 戦後の篠山を担ってきた人々
 - 1.1 近代以降におけるエリート層の動向
 - 1.2 「地域エリート」存立構造の変化
 - 1.3 「遅れてきた主役」としての「地域エリート」
2. 「地域エリート」の篠山定着
 - 2.1 農家跡継ぎの宿命と学歴価値の間で
 - 2.2 宿命を引き受けていくこと
3. 「地域エリート」存立構造の揺らぎ
 - 3.1 農高の校種変更と農科大学の移転
 - 3.2 酒造出稼ぎの衰退

結びにかえて

引用・参考文献

はじめに

近代以降、農村人口の都市移動は、労働力としての移動のみならず、学歴を身につけて都市上層に流入する立身出世型の移動を含んで本格的に展開していった（竹内2005）。都市社会の発展にともなって都市—農村関係が顕在化するなかで、地元に残る人々は、出て行く人々との対比を通じて自身の人生を意味づけるようになる。とりわけ、学業優秀であったり、教育熱や都市熱を持ちつつも、農家の跡継ぎとして地元に残ったりした人々にとって、地元で定着することは相応の葛藤を生じさせるものであった（高田2003）。

本稿は、兵庫県篠山市（旧多紀郡）を舞台に、戦後篠山に定着し、地域社会を中心的に担ってきた県立篠山農業高校（現篠山産業高校——以降「農高」と表記）の主に昭和30年代卒業生への聞き取りを事例として、学歴価値を内面化した彼らが農高に進学し地元に残ることへの葛藤と引き受けのプロセスに着目しつつ、戦後篠山における「地域エリート」の存立構造とその変遷を描き出すものである。

「地域エリート」とは、ここでは、近代以降の篠山において、一定規模の農地所有を基盤とし、

農高卒業後地元に着して主に行政、農業経営、丹波杜氏等として地域社会を中心的に担ってきた人々を指すものとする¹⁾。

篠山は京阪神都市中心部から60キロ圏内にある兵庫県中東部丹波地方の地方都市である。旧篠山藩域にはほぼ重なる当地域は古くから独自の文化的基盤を持ち、市街地は古くからの城下町の趣を残しているが、全面積の4分の3は森林で占められており、周辺は稲作を中心とする農村地帯が広がっている。近世以来「丹波杜氏」の名で知られる神戸・灘方面への酒造出稼ぎが有名であり、夏場の農業・冬場の酒造出稼ぎが当地域の伝統的な就業形態であった。この篠山においても高度成長期以降の農業離れは著しく、昭和50-平成17年の30年間に農業人口は8052人から3509人へと半減している（国勢調査）。平成11（1999）年に旧多紀郡4町（篠山、丹南、今田、西紀）の合併により誕生した篠山市は合併先行モデルとして注目を浴びたが、合併特例債を活用した大規模な施設整備によって負債が膨らみ財政危機に直面、平成19（2007）年に新市政移行後は「篠山再生市民会議」が発足し、行財政改革が進められている。

1. 戦後の篠山を担ってきた人々

1.1 近代以降におけるエリート層の動向

はじめに、篠山エリート層の前史と近代以降の動向について概観しよう。

近世の篠山は山陰と京都をつなぐ交通上の要衝であり、代々譜代大名が支配する地域であった。しかし、稲作以外にみるべき産業がなかったことから藩財政は貧しく、古くから農民が出稼ぎに出ており、百姓一揆も頻繁であったことが記録されている。こうしたなかで、明和3（1766）年青山藩政下において2代目藩主青山忠高が藩校新振徳堂を設立し、学問振興が掲げられた。

明治19（1886）年、旧藩主青山忠誠はこの振徳堂を再建して鳳鳴義塾（後の兵庫県立鳳鳴高校——以後「鳳鳴」と表記）を設立し、旧藩士子弟のための人材育成機関を設立する。また、東京赤坂（現在の青山通り）邸宅内にも学生寮「尚志館」を用意して旧藩士族の優秀な子弟を選別招致し、学資を与えて遊学させるなど、篠山出身エリート層のための出世ルートの確立に尽力した。鳳鳴はもともと旧藩士子弟のためのものであったが、明治中期以降にはすでに平民層の入学が大半を占めるようになる。大正9（1920）年入学者父兄の職業に占める農業の割合が51.0%と半数を超えていることから（天野1991：85）、本校が比較的早い段階から、周辺農村部の優秀な豪農層子弟に近代的教育を授け、大都市圏に送り出す役割を果たしていったことがうかがえよう。

大正生まれの豪農子弟の転出事例を見てみよう。Aj氏は大正14（1925）年、旧篠山町の大地主

1) 本稿では、篠山に着し地域社会の各方面において指導的立場にある土着の人々全般を広義の篠山の地域エリート、そのなかでも、農高出身で一定の農地を所有し地域を主導してきた人々を狭義の「地域エリート」として操作的に定義している。篠山における広義の地域エリートには、農高出身の農家子弟のみならず、城下町部の商家子弟等も含まれる。元来鳳鳴は農高との対比から都市上層に人材を輩出してきたと捉えられているが、一部には卒業後地元に着し地域エリートとなる卒業生も存在している。なお、調査対象者は篠山産業高校同窓会長、丹波杜氏組合長らの紹介を主とした機縁法で11名収集し、一度または複数回のインタビュー調査を実施した。なお、本稿で取り上げた事例のうち、Aj氏、Bh氏については筆者がこれまで行ってきた多紀郷友会会員追跡調査によるものである。詳細については奥井（2009）。

A家の次男として生まれる。農地所有規模が平均1町歩弱である篠山において、A家は農地15町歩、山林53町歩、江戸時代には油屋、酒醸造などを手がけ、藩主青山家にお金を融通するほどの大庄屋であった。Aj氏は鳳鳴に進学し早稲田大学国文科卒業後、中原淳一、吉原信子らが活躍する頃の某少女雑誌編集社に就職し、そのまま東京に定着している。Aj氏のきょうだいは7人、A家の教育方針により男兄弟は鳳鳴から東京の上級学校、女兄弟は篠山女学校から京都の上級学校に全員進学している。長兄は鳳鳴から早稲田大学に進学して尚志館に寄宿し、卒業後は銀行に就職して神戸に定着したため、篠山には200坪の空き家と25坪程度の墓を残し、現在は長兄の息子が管理している。

Aj氏の事例からは、本来の地方名望家的な意味でのエリート層が、すでに戦前の段階から旧藩主の築いた出世ルートに乗って都市転出していたことが分かる。

こうしたなかで、地元の人材育成のための機関として昭和8（1933）年に設立されたのが、農高の前身である多紀実業高等公民学校である²⁾。この設立の背景には、昭和恐慌下の篠山における自力更生の気運の高まりと、その一環としての農村中堅人物の育成という喫緊の課題があった³⁾。修業年限2年間、授業料や入学試験はなく⁴⁾、村長、学校長、青年団長が推薦する村の中でも勤勉な、いわゆる「模範青年」をだけを集めており、ゆくゆくは自作農家として村の指導的な存在となることが期待された。設立時の収容人員は50名と少なく、当時の多紀郡連合青年団が2000人程度であったことを踏まえると、いかに本校が精鋭の農村「地域エリート」教育機関としてスタートしたかがうかがえよう（『五〇周年記念誌』：66-67）。

農高は、設立当初から菊やカーネーション等の花卉をはじめとした商品作物の栽培に取り組むと同時に、近世以来の丹波杜氏の伝統も重視し教育の一環としていた。『多紀ジャーナル』に連載された農高元教諭河南頼夫氏の回顧録には「西羅先生（設立時校長——筆者注）の教育方針は、農村の中堅人士の要請として酒造出稼ぎに深い関心を持たれ、二年生は夏、酒造講習に出席し、冬は知人を頼り、灘その他へ酒造実習に行っておりましたが、丹波篠山の実業学校としてはまことに有効なものでした」とある（「公民学校から産業高校まで ⑤」『多紀ジャーナル』平成9年7月9日）

農高は、「地元のことなんか考えずにどんどん出て行く」鳳鳴卒業生の一方で、篠山に根ざし「土着してこの地域でこつこつ励み農業に従事する」公民学校（農高）卒業生、という異なる教育目的を持って設立されたのである（『五〇周年記念誌』：59-60）。

2) 正式名称は多紀郡篠山町外18ヶ村一部事務組合立多紀実業高等公民学校。昭和13（1938）年組合立多紀実業学校（乙種農業学校）、昭和16（1941）年甲種農業高校に昇格。昭和22（1947）年県に移管され県立篠山農学校となり、翌23（1948）年の学制改革により兵庫県立篠山農業高等学校となる。

3) 兵庫県の自力更生運動の歴史的性格を分析した庄司俊作は、篠山を県内でも自力更生運動エネルギーの比較的強い「Iグループ」に分類している。兵庫県立篠山産業高等学校『50周年記念誌』上に掲載された座談会「創立時代を語る」（昭和58年9月6日）では、昭和11年卒2期卒業生が「あの時は自力更生という言葉がようはやったね。」と回想していることから、当時の篠山に「自力更生」の雰囲気が強かったことがうかがえよう。

4) 当時の鳳鳴の授業料は25円、入学金は22円であったが、公民学校に授業料はなく、村によっては逆に手当が出ており、旧大芋村では日当10銭が出たという（『50周年記念誌』：67）。

1.2 「地域エリート」存立構造の変化

こうした鳳鳴と農高の位置づけは、しかしながら、時代を経るにしたがって徐々にその棲み分けの構造に揺らぎを生じさせていくことになる。

一つの要因は、跡継ぎを鳳鳴に進学させる階層が下方に拡大していったことにある。当地方の伝統的な酒造出稼ぎは、農民層の現金収入としては大きなものであり、最盛期の大正時代には毎年6000人近くが酒造出稼ぎに出ていたとされるが、昭和10(1935)年頃を境に徐々に衰退していき、国鉄や銀行、役場といった通勤兼業が増加してくる。こうした状況下において、周辺農村にも学歴価値が浸透し、従来のような一部の豪農層のみならず1町歩前後の中農層のあいだにも、跡継ぎを鳳鳴にやり都市部の大学に進学させるという流れが生まれてきた。

昭和9(1934)年に旧篠山町の約1町歩の自作農家(農業+酒造出稼ぎ)の長男として生まれ、鳳鳴から国立大学に進学して東京に転出したBh氏は、「私なんかのような、せいぜい1ヘクタールくらいの田んぼを持った長男が(都会へ)出たっていうのは、僕たちの世代が第一期生だったと思う。それまでは考えられなかったでしょう、そんなこと」と述べている。昭和20年代には、農家の長男であっても「勉強ができる子は鳳鳴」という雰囲気の一部には形成されつつあった。

一方、農高は、公民学校時代には選抜された農家の跡継ぎである長男だけが進学するところであったが、昭和21(1946)年の県立移管にともない女子部が設置され、さらに23(1948)年には学校制度改革によって兵庫県立篠山農業高校になる過程で、従来は「地域エリート」の育成機関として存在した本校もまた、高校教育の学歴序列化のヒエラルキーに組み込まれていくこととなった(長須1984)。つまり、「農家の長男が行くのが農高」のみにとどまらない複合的要因——学業成績、農業経営の可能性、家庭事情——によって、鳳鳴か農高かへの進路決定がなされるようになっていくのである。

この戦前から戦後への篠山における「地域エリート」存立構造の変化を理念的に表したのが図1である。

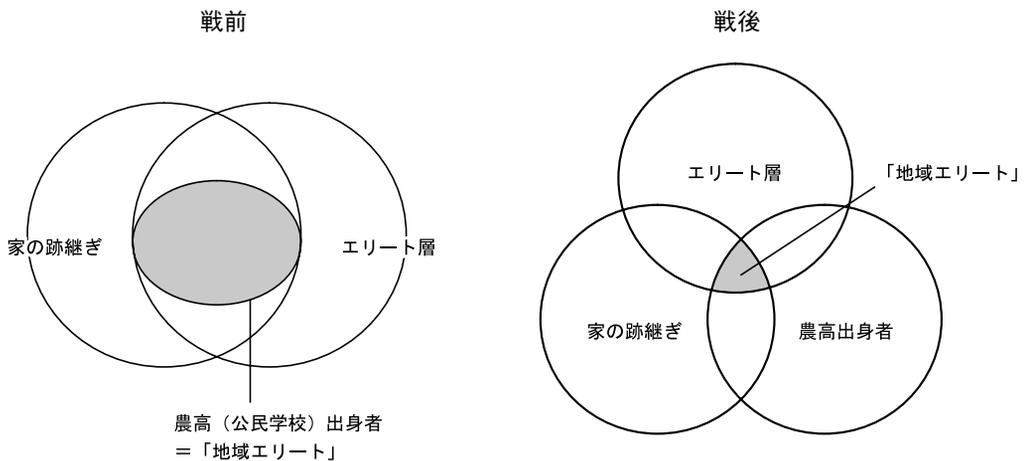


図1 地域エリートの存立構造の変化

戦前の「農高（公民学校）出身者」は、一定の農地所有を基盤とする地域における「エリート層」の、そして将来は地元にとどまって農業経営に携わる「家の跡継ぎ」であることが前提条件であった。しかし、戦前戦後の一連の制度変革の過程で、この「農高出身者」「家の跡継ぎ」「エリート層」というファクターは相互にズレを生じさせていくことになり、このズレと、それに対するジレンマは、戦後の篠山にとどまり地域社会を担ってきた「地域エリート」の自己認識を形作っていくことになるのである。

1.3 「遅れてきた主役」としての「地域エリート」

本稿で事例として取り上げる昭和30年代卒「地域エリート」（昭和10-20年代初頭生まれ）を、当時の全国的な農村社会の動向のなかで位置づけておこう。

農村社会が戦前とのつながりをなくしはじめたのが昭和30（1955）年とされるように（大橋1980）、「地域エリート」が青年時代を送った昭和30年代は、農村社会が高度経済成長の影響を受けて激変していく過渡期にあった。

とりわけ、本稿に深く関連するのは、敗戦後の農村における人口滞留から一転した若年人口の大量流出である。昭和28（1952）年まで40万人台であった新規学卒者のうち農業に就業する者は、昭和29（1953）年以降急速に減少し、昭和34（1959）年には17万人となっている。並木正吉は著書『農村は変わる』のなかで、この農村若年人口の流出を「地すべりの」と称し、それが農家の次三男のみならずあとつぎをも含む動きであることを指摘している（並木1960：14）。彼は農家戸数を30年で割った和を「農業就業人口の補充率」として、それが昭和30（1955）年卒業者では全国平均74%であったのが、昭和34（1959）年で全国平均48%となり、東海・近畿・山陽の19府県では34%にまで下落していることを明らかにした（同上：13）。つまり、昭和30年代前半は、農家の長男は農家を継ぐということの自明性が急速に揺らいでいく時期であったといえる。

昭和ヒトケタ前半生まれの世代が「戦後最後の農村社会の主役」とされるのに対して（大内2005：163-164）、大量流出がはじまって以降の世代は、農村社会の担い手として焦点を当てられることは少ない。しかし、昭和10-20年代初頭生まれの「地域エリート」は、農家を継ぐという自身の選択が刻一刻と少数派になっていくなかで、様々なしがらみと葛藤を抱えながら農村にとどまり、21世紀初頭までの地域社会を支えてきた⁵⁾。昭和ヒトケタ前半世代が、戦前からの連続性と自明性のなかで地域にとどまり一つの社会層を形成した戦後農村の「最後の主役」であるならば、彼ら昭和30年代卒「地域エリート」はいわば「遅れてきた主役」とも呼ぶことができよう。彼らは遅れてきたがゆえに、自身の選択の意味を不断に問い続けなければならなかったのであり、それは彼ら「地域エリート」と彼らが形作ってきた戦後の地域社会そのものをも特徴づけていくこととなった。

5) 並木はこの補充率が低い地域ほど跡継ぎの学歴が高いことに着目し、そこで「あえて農業を選んだ」若者たちを「スジ金入り」と表現し、「少数派につきものの悩みがそこにあったに違いない」という（並木1960：20）。

次節ではインタビュー事例をもとに、彼ら「地域エリート」が農高に進学し地元に残るにいたった経緯と葛藤を分析する。

2 「地域エリート」の篠山定着

2.1 農家跡継ぎの宿命と学歴価値の間で

「地域エリート」はその多くが家の跡継ぎとして篠山に留まった者達である。家の跡を継ぐことは「長男やから、必須条件」（昭和35年卒／丹波杜氏）「生まれた宿命」（昭和33年卒／旧西紀町長）であり、とにかく「農業やらなんという宿命を背負って」（昭和32年卒／丹波杜氏）農高に進学している。しかし、学歴価値が浸透する戦後農村社会において、「鳳鳴ではなく農高」であることは、学業成績が優秀であればあるほど、相応の葛藤を生じさせるものであった。

Ck氏（丹波杜氏組合長）／昭和32年卒

Ck氏は昭和15（1940）年旧篠山町の農業と酒造出稼ぎ農家に3人きょうだいの長男として生まれた。曾祖父の代から代々杜氏を務める家筋であり、先祖は明和2（1765）年に御影のK屋（現K酒造）に出稼ぎに出ていた「般若寺の万助」として記録に残る。農地は1町8反の「普通以上の規模」。中学校時代に鳳鳴にどうしても進学したかったCk氏は親戚を巻き込んで一騒動を起こした。

「私は高校進学の際に、篠山鳳鳴高校に行くと。親にもう全然隠れて。そこの抵抗が一番強かったんですよ。で親に、もう勝手に相談せんと、願書を、篠山鳳鳴高校に出して、（中略）それが私のおじさんというのが、あのう、偶然にも篠山中学で先生しとったのよ。（そのおじが願書を見つけて、『お〜い、お前とこの息子、えらいこっちゃぞ』と。『んな、あそこ（鳳鳴）やったら跡取らへんわ』と、うちの親父に言うたの。親父がびっくりしてしもうて（笑）。で、『鳳鳴進学するのあきめてくれ』って。『お前はとにかく農高行ってくれ』って。でそのおじさんいう、篠山中学の先生と一緒に、もう泣いて頼むわけや（笑）。（中略）わしはなんちゅうか、全然言うこと聞かんと…。で私は私の友達の家、夜逃げみたいにして、泊り込んだりね…面白かった。」

結果的に、Ck氏は父とおじの「口説き落とし」によって農高に進学し、卒業後は農業と酒造出稼ぎをするようになる。

ただし、前節で述べたような昭和30年代の状況下において、農家の長男であれば誰しものが、跡継ぎとして地元に残るために農高への進学が宿命付けられるわけではない。ここにはCk氏が「普通以上の規模」と表現するように、農家の規模や経済階層が関わってくると考えられる。昭和32（1957）年の篠山（旧多紀郡）における高校進学率は、定時制高校を含めて58.2%（男62.7%、女53.8%）と全国平均51.4%に比較すると高く、篠山の学問的風土を物語っているものの、まだ誰もが高校に進

学しうる状況ではなかった。農家子弟の多くが中卒の「金の卵」として都市転出していった高度成長期において、跡継ぎを農業高校に進学させるのは、一定の余裕のある農家であった。聞き取りの限りではあるが、「地域エリート」の実家の農地所有規模は当地域の平均農地所有規模が約1町弱のところ、1町強から2町前後と相対的に大きかった。つまり、農業経営（あるいは農業経営と酒造出稼ぎ）によって人並み、もしくはそれ以上の生活ができる見込みがあった上で、跡継ぎが学業優秀であっても農高に進学させるという戦略が現実味を持ったとみることができよう。

もっとも、跡継ぎを地元にとどめさせた要因は単純ではない。聞き取り事例のなかには、家族労働力による農業経営をするうえで不可欠な壮年男性が欠如していたというケースも少なくない。農業機械化前夜の農作業の厳しさは、実質的な労働力としての跡継ぎの責任をより一層彼らに自覚させる方向に働いた⁶⁾。

やや上の世代になるが、昭和27（1952）年卒の丹波杜氏Dk氏は、旧篠山町1町2反農家に6人きょうだいの4番目、三男として生まれたが、10歳離れた長兄が戦死し、次男はすでに養子に出ていたことから急遽跡継ぎとなり「昔は手作業ばっかし…親2人が歳がいったからね、やっぱり手伝わってあたまがあった」と農高進学の原因を述べている。また、旧篠山町1町5反農家の長男として生まれたEt氏（昭和32年卒／丹波杜氏）は、酒造出稼ぎをしていた父親が33歳の若さで亡くなったため祖父母と母親が百姓仕事をしており、祖父母から「早く一人前になって自分の跡継いでもらわかなわん」と「染み付いたように小さい時から、育てられて」てきたという。Et氏にとっても、農高に進学することは「農業やらなあかんという宿命」そのものであった。

インタビューからは、こうした「宿命」と都会への憧れとの間で引き裂かれていた学生時代の「地域エリート」の葛藤がうかがえる。

Ft氏（篠山市元助役）／昭和38年卒

Ft氏は昭和19（1944）年、旧篠山町の2町5反農家に3人きょうだいの長男として生まれた。耕作規模が大きく、また親が高齢だったこともあり、Ft氏は農業高校通学自分から「高校生なのか百姓なのか分からんほど」農作業をしていたという。都会で働きたいという希望が強かったFt氏は、年老いた両親への罪悪感に苛まれつつも、高校卒業時に京阪神の会社の就職試験を受けた経験を持つ。

「阪神間へ出たかったですけれども、（中略）両親が（歳が）いってましたからね、ですから私が農高へ行かせてもらった、のもそうでしたし、それがなぜ、阪神間へ、逃げるように出て行けるのか、というふうなことを私自身も思っていました。ですから、就職試験を受けながら、その頃は随分と悩みましたね。」

6) 動力耕うん機・小型トラクタ所有台数は、昭和30（1955）年の8万8000台から昭和35（1960）年74万5800台へ、同使用農家数は昭和30（1955）年45万6000戸から昭和35（1960）年211万3000戸へと激増した。また農業生産量は昭和30（1955）年10万8000トンから昭和35（1960）年は22万トンへと倍増している（牛山2005：31）。

採用通知を受け取ったものの、両親からは「ばかやろう」と「門前払い」されて断念し、地元の役場に就職することになったという。

Ft氏が農高を卒業する時分には、産業としての農業が置かれた状況が下向きであることは周知の事実となりつつあった。しかし祖父母世代や高齢の両親にとってはそうした時代の趨勢を読むことは難しかったのであり、それはなおさら彼ら「地域エリート」にとって地元にとどまる選択を「宿命」と感じさせることにつながったことが推測される。

一方で、「鳳鳴ではなく農高」であるということは、彼らがこの場所において努力して出世し「地域エリート」となっていく上での動機付けともなるものであった。昭和30（1955）年卒の丹波杜氏Ga氏は、成績が良く鳳鳴に進学し大学に進むことを強く希望していたものの、跡継ぎのため農高に進学し、卒業後は蔵入りをして30歳前に三役に上り詰める異例の出世を果たす。Ga氏はその意欲の源泉を「なんや、農高け？」と言われることに対する「何くそう」という気持ちにあったと述べている。

「僕らから、130人おって、トップクラスは28人しか…3年生になったら補習授業したりする時は、偏差値の上のほうの…僕らやって、その28人の中には入っとんねや。それくらいにおるのに、僕はこっち（農高）行かんなん。あ～っほらし～い…と思ってね。」「それでも（自分と同じくらいの成績だった同級生が）向こうは鳳鳴で、こちらは『農高け?』って。それで何くそって…よおし何くそって。（酒蔵に入ってから）毎晩毎晩、人の帳面見て（勉強して）。」

鳳鳴へのライバル心は、彼らが「地域エリート」として篠山を中核的に担っていく存在になるうえでの強烈な原動力でもあったのである。

2.2 宿命を引き受けていくこと

地元に残るという選択は、都市熱や教育熱を持っていればいるほど、筆舌に尽くしがたい葛藤をもたらしたことは確かである。しかし、彼らが地元に残り「地域エリート」として生きていくことを引き受けていった背景には、跡継ぎという「宿命」の消極的な受入れにとどまらない、様々な積極的要因もまた当時の篠山の中に存在した。

①地域農業の見込み

第一には、彼らの生活基盤としての地域農業に対する展望である。高度成長期を通じて全国的に農業をめぐる状況は急速に変化していくものの、それでもまだ昭和30年代の篠山においては「田んぼさえ守っておけば生活ができる」状況であり、経営規模が大ききだけ「人並みよりちょっと上」の生活が出来た、ということは見逃せない。

それと同時に看過できないのが兵庫農科大学の存在である。昭和24（1949）年に歩兵第七十連隊跡に設立された兵庫農科大学では、当時、戦時中に外地熱帯植物の研究等に携わっていた研究者達が在籍して篠山で地元の作物を使った特産物開発を行っており、この時期の兵庫農科大学での研究開発が現在の篠山の三大特産物である黒豆、山の芋、丹波牛（但馬牛）を育てていくことになった⁷⁾。農高に兵庫農科大学出身の教員がいたこともあり、同じ敷地内にある兵庫農科大学と農高は緊密なネットワークを有していたため、農高の学生の中には、農科大学で先端的な品種改良を学ぶ機会を得てのちに農業リーダーとして活躍する者も現われた。次のHt氏は、昭和30年代後半から農作物等品評会の受賞常連者であり、地域新聞にたびたび登場する篠山の代表的な篤農家である。

Ht氏（農業リーダー）／昭和34年卒

Ht氏は旧篠山町の1町1反農家に6人きょうだいの長男として生まれた。農業が比較的好きだったことから、高校進学時には周囲のクラスメイトから鳳鳴を勧められるも農高に進学する。通学時分から、農家のあり方として家族労働力を組み合わせた複合経営による農業専業を理想とするようになり、農科大学の研究室に出入りをして畜産や特産物の品種改良について学んできた。卒業後は父親がたびたび役場勤めの口を探してきたもののすべて断って専業を貫き、丹波牛の多頭経営と黒豆その他野菜栽培で経営を拡大して「一度も勤めに出ていない」ことを誇りとする。

「私が肉牛の関係ですっと関わりを持ってきたのは、農学部のなかで、名誉教授ですけど、63歳で退官されてね、F先生という先生がいたんですね。（中略）私はずっと教室に遊びに行かせてもうてましたんで、随分勉強させてもうた。で、そのことでうちの経営もぐんぐん伸びたし。極端に言うたら、昭和48年、49年くらいはかなり利益出た時期があったんでね、2年間の牛の売り上げだけで、当時の田舎の家が1軒建つくらい、稼げましたんで。」

Ht氏の語りからは、「田んぼを守って人並みの生活」には留まらない、篠山の農業に対してまだ明るい期待が持ちえた当時の雰囲気がみてとれよう。

②活発な青年団活動

高度成長期は青年団活動がまだ活発な時期であった⁸⁾。地元に残った「地域エリート」は青年団の中核的な存在として、ハイキング、読書会、映画鑑賞会などを開催し、また村同士の青年団との交流も活発であった。夏祭りの時期には多紀郡（篠山）内の「あっちの神社やこっちの神社

7) 産業高校同窓会長柳田昌三氏への聞き取りによる。

8) 『篠山町75年史』によれば、大正3年来の歴史を持つ篠山町青年団は戦後統制団体解散令により解体し、昭和27（1952）年に女子部を加えた形で再結成した。戦後から昭和30年代にかけての青年団活動は旧村単位で活発に行われていた。調査対象者や地域により活動のピークの記憶にはブレがあるものの、昭和40（1965）年2月20日『篠山新聞』掲載記事「青年団が改革に乗り出す 新団長のもと組織の再編成」には「青年団は何をしているかという声を聴くが、停滞しマンネリ化していることは明らかである」としてその理由の一つに人材不足を挙げている。農業人口の減少にともない、昭和30年代後半から活動に陰りがみえていたことがうかがわれよう。

や…」の盆踊りに浴衣を着て遠征し、夜更けまで飲み明かした思い出を語った昭和35（1960）年卒の丹波杜氏は、そうした青年団の交流を通じて出会った他村の女性と恋愛結婚をしている⁹⁾。

また、当時は旧町単位の青年団の弁論大会や運動会が非常にさかんであった。この弁論大会で頭角を現したのが昭和30（1955）年卒の故瀬戸亀男前篠山市長である。1町8反農家の長男として旧篠山町に生まれた瀬戸前市長は青年団で活躍し、その支持基盤を背景に昭和54（1979）年篠山町議、平成7（1995）年篠山町長に当選、平成11（1999）年には「合併第一号」の篠山市長となって全国的に名前の知られた「農高のエース」であった。

「昭和30年、農高卒業と同時に農村社会に飛び込み、青年団活動に熱中。弁論大会、討論大会、体育大会、演劇大会と、自転車ですべてを走り回ったものだ。（中略）先ず、人を信じること。自ら心を開き、飛び込んでいくこと、この生き方を培った青年時代の思い出は、懐かしさでいっぱいである。その当時の友達は今も『なっとう会』として、年1回は顔を合わせ、夜の更けるのも忘れ語り合うのである。」（平成8年9月 多紀郷友会『郷友』第388号掲載 瀬戸亀男寄稿「私の歩いてきた道これからの道」）

Ck氏をはじめ本稿で紹介する「地域エリート」の多くはこの「なっとう会」のメンバーである。こうした活動を通じて彼らは青春を共有する仲間集団——「コンボイ」——を獲得しえたのであり、それは篠山で生きていく彼らの人生に不可欠なものであったといえよう。

③酒造出稼ぎという生き方

こうした篠山での生活と同時に重要な意味を持ったのは、篠山の伝統的副業である酒造出稼ぎである。酒造出稼ぎによる現金収入は農家全体収入の25%を占めるとされるが、その経済面での重要性もさることながら、都会に出るということそのものの持つ意味も、決して小さなものではなかった。

上述の家出をしてまで鳳鳴に進学したかった丹波杜氏組合長のCk氏は、神戸灘五郷のK酒造に出稼ぎに来たいと思うようになった契機に、当時の農高が実施していた酒蔵見学で見た都会の鉄筋コンクリート酒蔵のインパクトを挙げている。

「その蔵が普通はもう木造の、まああの…小さい…こんなこと言うたらいかんけど、田舎の小さい木造蔵で、普通に地酒の酒屋さんみたいな感じで、酒蔵のイメージで見学に行ったところがやね？その（K酒造の）鉄筋の4階建てとか7階建てとかいう大～きい蔵を見せ付けられて。…やっぱり、若い私らにしたら、『お～っ、う～ん、さすが…灘の、酒の本場やな』って。その当時はね、灘では昭和30年代っていったらもう酒は毎年何割何割って売れるさかい、

9) 「地域エリート」へのインタビューでは、かつての青年団活動について言及する際、当時と比較して現在の若者に仲間がないことに憐憫の情を示し、異性との出会いの場がないことを危惧する発言が多くみられたことが印象的である。

「……で、そういう蔵を見たもんやから。」

また、篠山からの酒造出稼ぎ先は灘五郷を中心とした神戸周辺の酒蔵が多かったが、若かりし頃の彼らにとって、神戸三宮の煌びやかな繁華街——「赤いネオン」「青いネオン」——は、篠山にはない魅力を持つものであった。

Ih氏（丹波杜氏）／昭和35年卒

Ih氏は昭和16（1941）年、旧大山町の約2町5反農家に3人きょうだいの長男として生まれる。父親の勧めで農高に進学し、卒業後は杜氏をしていた親戚に連れられて酒造出稼ぎに出るようになった。明石・神戸方面の酒蔵に32年間勤めたIh氏は、自身を「半分は神戸人」という。

「私（明石での蔵入り当初は）室の子いうて、室の仕事しとったさかいにね。8時には帰ってきて仕事してたからね、でも4時から4時間くらいは、外に出てもかまへん。で、よう外の繁華街を歩いたりな（笑）。近くにはええ繁華街が、あった（笑）。三宮まで電車乗って行ったりしたしな。（中略）三宮に出て、**っていつて、三宮にあった飲み屋や。大〜きいとこで、そこで飲んだりな？また安うて飲ますんや、女の子もおるし…。」「酒造のほうも、慣れてきて、コツが分かってきて、逆に農業に…酒造りして帰ってきたら、春でしょ？そしたらもう、会社勤めというののなかから、今度逆に、田んぼ入らんなんという、嫌なイメージがしてな？春にこれから百姓にかかるというのがずんずん嫌になってな。」

こうした楽しみは、一方では春に篠山に戻り田んぼに入ることが「ずんずん嫌に」なったりするものの、少なくとも半年間は都会の空気を吸えるということは、若い彼らの都会生活への憧れを、家の継承責任と抵触しない範囲で充たすことのできる、彼らなりの落としどころであったといえよう。

3. 「地域エリート」存立構造の揺らぎ

こうした「地域エリート」を取り巻く構造は、しかしながら、昭和40（1965）年前後を境に大きく変わっていくこととなる。ここではそのメルクマールとして（1）農業高校から産業高校への校種変更、（2）兵庫農科大学の国立移管・移転、（3）酒造出稼ぎの衰退を挙げておこう。

3.1 農高の校種変更と農科大学の移転

第一は、農業高校から産業高校への校種変更である。団塊世代の中学卒業にともなう高校入学難が社会問題化しつつあった昭和36（1961）年、郡発展対策協議会は丹有地区における工業高校誘致運動を開始した（篠山新聞 昭和36年1月20日「多紀郡に工業高校の新設を提唱する」）。こ

の誘致運動は農高の校種変更問題へと発展していき、農高存続を求める教員や農高OBらとの激しい攻防が繰り返された。当時の農高校長であった坂井幸治郎氏は当時の様子を次のように回顧している。

「(攻防が激化するなか) 学校責任者の校長である私には、苦しい会合の連続であった。…農高の前校長である西垣喜代次氏やK県議、それに育友会、同窓会長を加えて、なんとか方法を考えていただき、静かな解決をしてもらおうとした。しかしこの計画は、かえって机をたたき合う激論を、繰り返えず(ママ)だけの結果しかでなかった。(中略)最後には一つの鎮静剤でもと、職員が手分けして、町村長の私宅を訪問し、農高存続を陳情したこともある」(『五〇周年記念誌』: 110)

しかし、必死の陳情もむなしく、高度経済成長にともなう産業構造の転換は時代の趨勢となって工業重視の流れを形成していった。当時の篠山新聞にはこうした農高関係者の陳情行動に対して、以下のように突き放した社説が掲載されている。

「農は国の大本であると考えられたのは戦前のこと、日に月に農業人口は減少の一途をたどり…(中略)多紀郡の将来を考えると、農業一本から工業化へと急角度の転身をはかることも必要ではないだろうか。」(篠山新聞 昭和36年6月15日「社説 工業高校の誘致問題について」)

結果的に、昭和38(1963)年農高は兵庫県立篠山産業高等学校へと改称し、機械科・電気科・商業科と生活科が設置された。農業科は東雲分校に1クラスを残すのみとなり、これまで農高が農科大学とともに行ってきた特産物開発は、東雲分校の部活動である農業クラブを中心に専門的に行われるようになった¹⁰⁾。この変化を『五〇周年記念誌』は「地元にとどまり地域農業を支える」農高から「各地各界で中堅層を目指す」産高へ、と表現している(『五〇周年記念誌』: 119)。

第二は、特産物開発の拠点であった兵庫農科大学の国立移管である。兵庫農科大学は「軍都」から「学都」への方向転換をはかる篠山のシンボルであり、その経済効果も莫大なものであったことから、農村部のみならず城下町部を有する旧篠山町にとっても現地移管は「悲願」であった。昭和39(1964)年9月に神戸大学農学部への移管決定後、旧篠山町では農大問題対策特別委員会が設置され、町民1万人の現地移管要望の署名運動を行ったり、町長、町議や総代が県への陳情を重ねたりと必死の抵抗を試みている(篠山新聞『「農大は現地移管で」町長ら大挙県へ 篠山町貸切バスで五〇人」昭和39年10月25日ほか)。しかし、農科大学の現地移管は実現せず、神戸市六甲台へと移転することとなった。

10) 東雲分校の農業クラブは現在も地元の特産物である山の芋や黒大豆を使用した研究で優秀な成果を挙げており、県や近畿学校農業クラブ連盟大会における受賞常連校である。

3.2 酒造出稼ぎの衰退

篠山の農業を下支えしてきた基盤を揺らがせるこれらの変化に加えて、高度成長期以降、全国的な農民の季節出稼ぎの増加にともない出稼ぎが社会問題として認知されはじめたことは、篠山の伝統であった酒造出稼ぎの衰退にも一層の拍車をかけることにつながった。昭和35-45年にかけてピークを迎えた出稼ぎ労働はその多くが建設業であり、現場での事故や賃金不払いといった労働環境をめぐる問題が取り上げられたが、それと同時に注視されたのが、出稼ぎ者が郷里に残す留守家族の肉体的・精神的ストレスに関する問題であった¹¹⁾。

また、昭和40年代以降全国的に農村青年の結婚難が問題となるなかで、一年の半分は夫が家を空ける出稼ぎの家は嫁入り先としてより忌避される傾向にあったことから、結婚を機に酒造出稼ぎをやめて地元の農協や役場、零細企業に転職するようになった者も少なくなかったという。昭和41(1966)年に結婚したある丹波杜氏は「春に式挙げたら、秋には嫁さんほっといて出ていかんなんさかいね。(勤め人は)出張とか、転勤とかあるにしても、(酒造りは)嫁さんほつたらかして、毎年毎年毎年行くんやから…」と述べている。この言葉には、篠山のなかでも勤め人世帯が増加するなかで、酒造出稼ぎ世帯の留守家族の苦労が勤め人家族との対比のもとで語られるようになったことを物語っている。

昭和39(1964)年の篠山新聞には、酒造労務者不足で杜氏が人集めに苦戦する様子が取り上げられているが、その一因としては「約半年も家族と離れて暮らすという変則的生活に見限りをつける人人(ママ)がではじめた」ことが挙げられている(篠山新聞「酒造労務者不足 杜氏ら、要因確保に懸命」昭和39年11月15日)。酒造出稼ぎ人口は昭和30(1955)年2026人、昭和35(1960)年1829人、昭和53(1978)年1091人と高度成長期を通じて急減し、平成18(2006)年にはわずか160人となっている。

結びにかえて

本稿では、農高出身「地域エリート」が地域に留まるにあたっての葛藤と引き受けに焦点を当てながら、戦後篠山における「地域エリート」の存立構造とその変化をみてきた。

学歴価値を内面化した彼らが、鳳鳴に進学し都市に出て行く同級生たちを横目に見ながら、篠山に留まって農地を守って生きてきた背景には、家の跡継ぎという宿命の重い鎖がまずもって存在していた。しかしながら、鎖で片足を土地に括られた彼らが、もう片方の足を自分の意志でその土地に下ろそうとした時、換言すれば、「この場所で見られる夢を見て生きていこう」とした時、昭和30年代の篠山には、少なくとも彼らが夢を見るだけの余地が相応に存在していた。40年代以降の篠山が経験した近代化プロセス——特産物開発の拠点の喪失、丹波杜氏の伝統の衰退——は、地域がその固有性を失っていく過程であると同時に、「地域エリート」が「この場所で」の人生を引き受けていくだけのプライドの調達装置が篠山から失われていく過程でもあった。

11) 1960年代後半から1980年代初頭にかけては、NHKにおいて出稼ぎ者やその家族を取り上げたドキュメンタリー番組が数多く制作されている(北原・安部2005:243)。

「地域エリート」達は昭和40年代以降、農科大学移転後の篠山における農業関連施設の建設や¹²⁾、丹波杜氏の出身地として篠山の高校に醸造科設置を働きかけたり、出稼ぎが忌避されるなかで酒造工場の篠山誘致運動といった形で、急速に綻びはじめた「地域エリート」存立構造の建て直しを期したものの、時勢に棹差すことは難しかった。

平成19(2007)年の「農高のエース」前篠山市長引退を象徴的な出来事として、農高出身「地域エリート」が篠山を牽引してきた時代は終焉を迎えつつある¹³⁾。土地への責任に裏打ちされた愛着をもって地域を担ってきた「地域エリート」のような存在が退陣した後の篠山の担い手とは誰なのか、また彼らにとって、土地への愛着と人生における場所の意味はどのような関連をもって立ち現われてくるのだろうか、この点については今後の課題としたい。

付記 農業高校OBへのインタビュー調査の実施にあたっては、元農業高校教諭で産業高校同窓会長の柳田昌三氏、丹波杜氏組合長小島喜代輝氏をはじめ多くの方々にご協力をいただきました。皆様のご厚意に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 天野郁夫,1991,『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界—』有信堂弘文社。
- 牛山敬二,2005,「戦後改革期の農村社会」田畑保・大内雅利編『戦後日本の食糧・農業・農村第11巻 農村社会史』農林統計協会。
- 大門正克,1994,『近代日本と農村社会—農民世界の変容と国家—』日本経済評論社。
- 大橋一雄,1980,『農村生活譜』日本経済評論社。
- 奥井亜紗子,2009,「農村跡継の都市移動と家の継承——軍学校進学者の「立身出世」型移動を事例として——」『社会学雑誌』26号,神戸大学社会学研究会。
- 河南頼夫,1999,『公民学校から産高時代まで』多紀ジャーナル連載記事抜粋小冊子。
- 北原克宣・阿部健一郎,2005「出稼ぎ問題——出稼ぎと農村社会の変貌——」田畑保・大内雅利編『戦後日本の食糧・農業・農村 第八巻 農村社会史』農林統計協会。
- 篠山新聞バックナンバー 昭和35-40年代
- 篠山町役場,1955,『篠山町七十五年史』。
- 庄司俊作,1991,『近代日本農村社会の展開』ミネルヴァ書房。
- 高田知和,2003,「農村青年の都市文化受容についての一考察」『年報社会学論集』16号,関東社会学会機関誌編集委員会
- 多紀郷友会編,『郷友 創立創刊一〇〇周年年号』平成3年12月。
- 編,『郷友』第388号,平成8年9月。

12) なかでもなっとう会メンバーであり農業リーダーのH氏は農業試験場や農産加工場の建設を瀬戸前市長に積極的に提案してきたという。

13) 「地域エリート」の代表的存在である瀬戸亀男前市長は病氣療養のため二期目半ばに引退した。鳳鳴出身の酒井隆明現市長は元弁護士であり、県会議員を経て市長に立候補している。

竹内洋,2005,『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望[増補版]』世界思想社.

長須祥行,1984,『農業高校——近代化農政の縮図』三一書房.

並木正吉,1960,『農村は変わる』岩波書店.

矢野晋吾,2004,『村落社会と「出稼ぎ」労働の社会学——諏訪地域の生業セットとしての酒造労働と村落・家・個人』御茶ノ水書房.

兵庫県立篠山産業高校,1984,『五〇周年記念誌』.